

平成艸紙



おりおりの記

絵の見方

日動画廊
代表取締役副社長

長谷川智恵子

「絵は不勉強で分からない」と謙遜される日本の方は多い。欧米の知識人は美術に深い造詣はなくても、絵を前にして決して分からないと言わない。学問は積み重ねていくものだが、絵の好き嫌いを判断するのは感性であり、人それぞれ磨き方があると思う。どうも日本は美術を趣味のひとつ程度にとらえられている傾向があるようだ。

画商をしていると、たまにキャンバスと絵具の材料費は同じなのにどうして値段に違いが出るのか、と聞かれることがある。現存作家の場合、社会的地位や知名度によって値段が決められる傾向があるが、物故作家となるとそうはいかない。画家が魂を込めて描いた絵はエネルギーのようなものを発していて、多くの人に感動をもたらす、そこに絵の価値が生まれるのであり、値段の違いなのだとお答えしている。15世紀に描かれたルネサンス絵画は、今でも美術館を訪れる人に感銘を与えている。どの時代でも人間の美への欲求は永遠に続くのだと思う。

絵は好き嫌いでご覧になるのが一番良い。私たちの感性はひとそれぞれで好みも違う。それは毎日お付けになるネクタイや洋服に反映され、そう

難しいことではない。美術も同じである。美術館や画廊を訪れて、もし自分の部屋に飾るのならどれがいいか、その選択が



一つの基準である。絵には力を感じるもの、静寂さを感じるものと多様な作風がある。ひとそれぞれ好きな絵は異なるのは当然である。

好きな絵が見つかったら、その画家はどんな人なのか調べてみるのも面白い。親近感も湧いてくる。次回、その画家の作品と再会したら感じ方は大分変っているだろう。

海外出張の折になど、土曜日曜の仕事のできない日に美術館巡りをするのもおすすめである。また、画廊の入場料は無料である。アポイントの合間に画廊を覗かれるのもいい。たくさん絵を見ているうちに自然と感性が磨かれる。難しく考えないで、まずは絵を見ることから初めて欲しい。必ず好きな絵、好きな画家が見つかるはずである。